

## 『枕草子』「うつくしきもの」の〈落とし穴〉

―類聚的章段の〈読みのベクトル〉―

中田幸司

### 要約

『枕草子』「うつくしきもの」に言語学のレトリックである列叙法を応用し、〈題目〉と〈項目〉のかかわりと、〈項目〉の機能について論じた。また、現行の高等学校古典教育において問われる「共通性」の読み取りには大切な前提が見落とされていることを提起し、多様化社会における古典教育に資する新たな〈読みのベクトル〉の必要性を示した。

キーワード…枕草子、類聚的章段、古典教育、〈読みのベクトル〉

### 一、はじめに

「日本で学ぶ、日本を学ぶ」――外国人に向けた日本への留学を誘うキャッチコピーではないが、日本にしながら、まだまだ日本のことを知らないと感じることが少なくない。世間では「グローバル化」や「多様化社会」が叫ばれ、「日本を学ぶ」というと、それは伝統文化――主に歌舞伎や落語あるいは能や狂言、茶道など――をインバウンドによる体験型プログラムとして広く提供する時にも用いられる。

一方、日本古典文学に関しては世界基準で研究が進んでいることはここ数年、顕著である。<sup>〔1〕</sup>ただし、日本古典文学にふれる機会は必ずしも現代においては多くはなく、むしろ教育現場での授業内に

限られている、といってもいいくらいである。

さらに、高等学校では古典教育の占める時間が減少するという。<sup>〔2〕</sup>この時間数の減少に抗うことは困難ではあるが、貴重な古典教育の時間を充実させるためには何が求められるのだろうか。このことを考えるとき、ひとつの指針としては古典文学の研究成果と教育・指導内容のより密接な連動である。

以下、教科書に掲載される古典教材『枕草子』「うつくしきもの」を対象に、何が、どう書かれているかという点を論じた上で、指導のポイントの〈落とし穴〉を示し、その見直しとして「読むこと」への方向性――〈読みのベクトル〉――を具体的に提案したい。このことは限られた時間で古典教育にふれる場合に大切な観点となるう。

所属…文学部国語教育学科

受領日 二〇一九年一月三十一日

## 二、『枕草子』類聚的章段の研究史上の問題

研究史上、『枕草子』を広め、かつ深めた一人に池田亀鑑がいる。

池田が『枕草子』を理解するために示した分類基準は今日、類聚的章段・随想的章段・日記的章段として理解されている。<sup>(3)</sup>これらの分類基準は有効な点も多いが、分類することで見落としていることもある。池田の分類基準にはなにより章段の認識があることはいまでもない。だが、この章段に関しても問題が残る。その代表的なひとつが章段の区分である。今日出版されたいくつかの『枕草子』を確認すると、たとえば、高等学校の教科書にも掲載される「うつくしきもの」は、

一四四段（萩谷朴・日本古典集成、渡辺実・新日本古典文学大系）

一四五段（松尾聰・永井和子、新編日本古典文学全集）

一四六段（田中重太郎・日本古典全書、石田稜二・角川ソフィア庫、増田繁雄・和泉叢書）

一五一段（池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔、日本古典文学大系）

一五五段（榊原邦彦・枕草子 本文及び索引）

などと揺れがあり、本文を提示するときをはじめ、章段の区分を比較するときには注意を要する。<sup>(4)</sup>そもそも章段は便宜的に区別されたものであり、すでに編纂者・校注者のひとつの解釈が示された結果である。そうすると、この章段の区切りとはどこにあるのか、ある

いはもとより、章段とは何であるのかを今一度検討する必要も出てきている。このことは、近時、津島知明が「もとより伝本には第何段という区分はない」とし「章段集合」という捉え方により複数の連続した「章段群」を対象に日記的章段を論じている。<sup>(5)</sup>たとえば類聚的章段についてみると、これらは「は」型・「ももの」型に分類できるが、底本の三巻本は「は」型も「ももの」型も「章段群」を作る傾向にあることは容易に確認でき、本稿に述べる「うつくしきもの」も同様である。この類聚的章段については今日の伝本に「類纂本」があることを考えても、『枕草子』の原形を考えていく上で重要である。<sup>(6)</sup>

また、なによりも随想的・日記的章段と比べて書式に大きな違いがあるのが類聚的章段の特徴である。それは大まかにいえば、散文でありながら、韻文としての要素を含んでいるとでもいうのであるうか、「いつ・どこで・だれが・なにを・どうした・なぜ」という5W1Hの情報が満たされない〈余白〉のある叙述である。

特に、冒頭に示される「は」・「ももの」は〈題目〉のようであり、以下に続く内容を〈項目〉のように示されている。この〈題目〉と〈項目〉の関係をどうとらえるのか、さらに〈項目〉には何がどう示されているのか、その上で、それが古典教育においてどう活用するのが望ましいのかを述べていく。

### 三、教材としての『枕草子』「うつくしきもの」——「共通性」を問うこと

今日『枕草子』は広く人々の知るところにある。古典文学の研究史からすると『古今和歌集』や『伊勢物語』あるいは『源氏物語』に比べると浅いことが指摘されるものの<sup>9)</sup>、「国民的古典文学」とも位置づけられよう。それは主として古典教育によって生徒に教えられ、伝えられ、読み継がれてきたことで広く人々に浸透し、「春はあけぼの」の初段はメディアにも時に用いられる<sup>10)</sup>。

この『枕草子』を古典教育において教科書によって学ぶときには、その単元の時間にも限りがあることや、学べき項目が多岐にわたることなどから、「読むこと」によって思考することばかりに時間を費やすことができない。そのため、自ずと掲載される章段も限られ、時には途中で授業を終えなければならない場合もあるのが実状である。

このとき、『枕草子』の全体像をとらえることも一方では必要であろうが、他方、限られた部分的な学びから得られることは何かを再考することも求められよう。これらを考慮するため近時、読者像をとらえなおす姿勢が示され、読みの姿勢を新たにする提唱も行われはじめた<sup>11)</sup>。その結果、必ずしも全文・全体を把握していない、その部分的な範囲の中での考察や議論に対応することが求められてこよう。

一方で、教科書には指定された考察のポイントがある。さまざまに限られた条件の下ではこれらの考察のポイントはより重要になっ

てこよう。そのため、今日の教科書に載る「うつくしきもの」の本文と学習のポイントをあげて問題点を示していく<sup>12)</sup>。

うつくしきもの 瓜にかきたるちこの顔。雀の子のねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちこの、急ぎて這ひ来る道に、いと小さき塵のありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人ごとに見せたる。いとうつくし。頭はあまそぎなるちこの、目に髪のおほへるを、かきはやらで、うちかたぶきて物など見たるも、うつくし。

大きにはあらぬ殿上童の、装束きたてられてありくもうつくし。をかしげなるちこの、あからさまに抱きて、遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、いとらうたし。

雛の調度。蓮の浮き葉のいと小さきを、池より取りあげたる。葵のいと小さき。何も何も、小さきものはみなうつくし。

いみじう白く肥えたるちこの、二つばかりなるが、二藍の薄物など、衣長にて襷結ひたるが、這ひ出でたるも、また短きが袖がちなる着てありくも、みなうつくし。八つ九つ十ばかりなどのをのこ子の、声は幼げにて文よみたる、いとうつくし。

鶏の雛の、足高に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよひよとかがましよう鳴きて、人の後先に立ちてありくもをかし。また親の、ともに連れて立ちて走るも、みなうつくし。かりのこ。瑠璃の壺。

『枕草子』第一四五段

これらの本文に続いて、教科書ごとに学習のポイントが示される。<sup>13)</sup>

A①作者が「うつくしきもの」として挙げたものを、箇条書きにしよう。①で挙げたものには、どのような特徴があるか、考えよう。

『新編国語総合』（東京書籍、二〇一七年）

B本文で「うつくし」としてあげられているものについて、どのような共通点があるか、考えてみよう。また現代にも通じる感じ方があるかどうか、話し合ってみよう。

『新精選古典古典編』(明治書院、二〇一八年)

C「大きにはあらぬ殿上童」、「いみじう白く肥えたる児の、二つばかりなる」、「八つ、九つ、十ばかりなどの男児」に共通する「うつくし」さとは、どのようなものか、まとめてみよう。

『新高等学校古典B』（明治書院、二〇一八年）

D 作者はどのようなものを「うつくし」と感じているのか、整理してみよう。またそこから「うつくしきもの」の共通性を考えてみよう。

『高等学校改訂版標準古典B』（第一學習社、二〇一八年）

E1「短きが袖がちなる」、「衣短なるさま」とは、それぞれのよ  
うな様子をいうのか、説明してみよう。

2 作者の「うつくしきもの」の見方はどのようなものか、「うつくしきもの」として挙げられている物事の共通点から考えてみよう。

『新探求古典B古典編』(桐原書店、二〇一八年)

上のA→Eを概観すると、その傾向は「うつくしきもの」として挙げられたものに対して共通性を問うものである（一部は具体的な対象を示すものもある（C））。この共通点・共通性（以下「共通性」）を見出すことには何が求められているのだろうか。

四、〔項目〕を列挙すること——〔列叙法〕をヒントに

前述したように類聚的章段は冒頭に〈題目〉として「～もの」と提示され、このひとつの〈題目〉に応じた〈項目〉が以下に続く。

このとき、この「題目」と「項目」の関係をどのように理解するか。また、「項目」からはどのような特徴が読み取れるのかが問題となる。ここに「問い」と「答え」の関係、あるいは「～は」型には「主語的題目」―「述語的項目」、「～もの」型には「述語的題目」―「主語的項目」を見ることなどがこれまでも指摘されてきた。<sup>14)</sup>

古典教育における『枕草子』類聚的章段を考えると、これらの捉え方は有効であろう。それは、具体的なことがらを抽象化するこ

とでもあり、他の事象に応用できる汎用性の高い次元に置き換えて、理解を深めることにつながるからである。このような汎用性の高い見方として、日本語学においては「レトリック」という観点からの指摘がある。<sup>(15)</sup> 多門靖容は〈題目〉と〈項目〉を「カテゴリー」と「メソッド」として把握した。この観点はさらに、レトリックにおける「列挙法」という観点へと継承され、森雄一によって再確認された。森

類似性をもとにメンバーを列挙することで新しいカテゴリーの形成を見て、そこに表現者の比喩的発想を認めることができる

と多門の論をとらえなおしている。この「比喩的発想」とは、一方で抽象的な事象を具体的にしていくこと、つまり喩えていくことにもつながるが、森の指摘において重要なのは、それが列挙されていることに注視した点にある。森はそれを「列叙法」として、以下の野上弥生子の用例にその特徴を読み取る。<sup>16)</sup>

堀川的一条通りに近い空地の、はじめはほんの二、三軒の露店がいつぱしの市場になって、たえず景氣のよい売り声をたてている魚屋、八百屋、鍋釜、桶、ざる、箒木の荒物屋から、らしやの合羽、鍔広帽子、縫い取りの手巾、ねり玉の頸飾り、と触れこみの南蛮物もいかさまものばかりの雑貨屋、食べもの屋、それに交って呉服屋までが、屋台のまわりにかつと虹がたつほど派手に並べたてた染料、織物、綾、綸子、縹子、緋縹子、なんでもございますで、つい川向こうの西陣を尻眼にかけての商い振りを見せた。

野上弥生子『秀吉と利休』

この例には、列叙法の上記の二つの特色が複合された形であらわれている。下線部の表現は、言語の持つ省略性という性質からは、「染物など」とか「様々な物」とか表現できるものである。それを、個々の事物を並べたててすることは、言語の省略性

への抗議としての彩的性格を醸し出している。と同時に、これらの物を列挙することによって、一つの新たなカテゴリーを形成している。この二面性の両方があるものを列叙法の特徴がよくあらわれたものと考え、「新たなカテゴリーの形成」の側面が強くあらわれたものを典型的な列挙法としたい。

右に見た「列叙法」という観点は、古典教育における類聚的章段を理解する上でも応用できるのではないだろうか。なぜなら、〈項目〉はそもそも列挙されているからである。ところが、教科書に掲載された前述のA―Eを見ると、この前提となる点が見落とされていることがわかる。それは、どの教科書にも通じる、前述の「共通性」を問い、考えさせることにある。このことは、なによりも「〈項目〉が列挙されるとはどういうことか」を検討する必要があるもの、その余地がなく——少なくとも教科書に明記されずに——、現行のA―Eのような「共通性」が問われるのである。ここに列挙のされ方——「列叙法」をヒントにして——に目を向けることがまずはこの章段に対峙する上で避けられないのである。

改めて教科書に示されたことを見ると、たとえば「箇条書きにしよう」(A)がもつとも象徴的である。それはここにいう「箇条書き」が〈項目〉の列挙をふまえたときに可能となる「箇条書き」と理解できるからである。

これらをふまえると、「うつくしきもの」の列挙はどのように理解できるのだろうか。前述の森が例としてあげたものは、単純な名詞の並列であった。「うつくしきもの」にも文末には「雁の子。瑠



璃の壺。」と名詞の並列があるが、それ以外には属性がさまざまもなってくる。そうなると、なおさら、これらの名詞の並列との位相差を吟味する余地が出てくるのである。

ちなみに森は列叙の意味として「個々の事物を並べたててすることは、言語の省略性への抗議としての彩的性格を醸し出している」という。たしかに「うつくしきもの」の〈項目〉は「瓜にかきたるちこの顔。雀の子のねず鳴きするにをどり来る、など」として閉じられることはなく、以下に〈項目〉が続くということは「省略性への抗議」、つまりは省略を避ける志向があるという見方もできよう。一方で、すぐに結論がでるものではないが、何をもって〈項目〉を列挙することが閉じられたのかは検討する必要がある<sup>(18)</sup>。省略を避ける志向によって列挙を続けるという連続性をもつのが「うつくしきもの」の〈項目〉と〈項目〉のつながりであるとき、そこにはこれらを推進させるべき表現を追う〈読みの横ベクトル〉が働いていると考えたい。これはひとつの〈項目〉を掘り下げていく背景を追う〈読みの縦ベクトル〉とともに古典教育における読みの方法の提案となる。以下、具体的に〈読みのベクトル〉を考えていく。

## 五、「うつくしきもの」の〈項目〉を読む——前文から後

### 文への〈読みの横ベクトル〉

「うつくしきもの」は冒頭を見ると、

うつくしきもの。瓜にかきたるちこの顔。雀の子のねず鳴き

するにをどり来る。

とある。瓜にかかれたちこの顔とは具体的な事物であるが、雀が踊るようにやってくるのはその様子であり状態である。どちらも「かわいらしい」ということに通じるとはいえ、明らかに質が異なる。さらに、

二つ三つばかりなるちこの、急ぎて這ひ来る道に、いと小き塵のありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人ごとに見せたる。

というのもそのような様子であり状態であるならば、直前の雀とちこの違いはあるが、通じると理解されるところもある。この雀とちこの属性ともいえる詳述された内容を比較してみると、さらに違いは明らかにになる。

雀はどこを通過してきたのかは明らかではないが、ちごは急いで這ってきた道、さらにその途中の塵、そしてそれを指でとって大人に見せるという過程が詳述されている。雀に関する情報とちごに関する情報の量には明らかに多寡がある。あるいは、雀はねず鳴きへの反応を含めてかわいいのであるが、ちごはめざとく自らが塵を見つけ、指にとり、大人に見せるという一連の行為がかわいいのである（あるいはこのときの大人の反応も影響している）。

このように、冒頭の部分にみる〈項目〉の列挙をみても、それぞれの〈項目〉間には大きな位相差がある。ところが、この先を読む

と「小さきものはみなうつくし」とある。この評言には注目しなければならぬ。なぜなら、「共通性」を考えると、この部分がいわゆる重要な根拠となるからである。だが、それでよいのだろうか。この評言はそれまでの〈項目〉の列挙に対し、いったん列挙の流れが中止し、そこまでをふりかえり、総括となっている。このことに問題はないのだろうか。ここまで列挙された〈項目〉にはそれぞれの特徴となる属性が示されてきた。しかしその部分をそぎ落とすように、抽象化されてしまい、「小さいものはかわいい」ことに収束されてしまう。

この評言は繰り返しになるが、教科書が求める「共通性」を見出す上での根拠のひとつを担うのであろうが、それでは、〈項目〉の表層的な読みになりかねないのである。〈項目〉が列挙されるとき、このようなある種のまとめは、〈項目〉の個性を消してしまう恐れがあるともいえよう。むしろ、章段の主題などを理解しようとする上では必要なかもしれない。だが、「共通性」を問うことは、実は属性を脇へ置くことであり、読むことにとって、求められるのは、まずは〈項目〉間の違い、つまり位相差であろう。その特徴を理解する上では、「共通性」を問うことは功と罪のあることなのである。

一方で、この「小さきものはみなうつくし」は、〈項目〉と〈項目〉をつなぐ機能を示している点でも重要な評言である。「うつくしきもの」は「瓜」と「雀の子」以下を読み進めるとき、〈項目〉間の関連性が見出しにくい。いわば物語や日記のように結びついているかというところではないのである。「瓜に顔をかいたところに雀の子が来て……」などという文脈にはなっていないのである。

そこには大きな余白があり、「なぜ瓜の〈項目〉のあとに〈雀の子〉の〈項目〉が続くのか」、あるいは「瓜から雀の子へという展開をいかに理解するか」という問題も生じてくる。これらの問いに対する答えのひとつが「小さきものはみなうつくし」となるのだが、これが答えとして十分かという点必ずしもそうではないだろう。

〈項目〉に選ばれたものが何を根拠にこの順序に列挙されたのかの、今は十分な答えを持ちえないが、「うつくしきもの」を読む上では、従来の読むという行為において、より注意を要することはたしかであろう。たとえば、前文から後文へと読むことは〈項目〉が次の〈項目〉につながる推進力と重なっている——これらを〈読みの横ベクトル〉とする——が他のジャンルのいわゆる散文とは異なり、文脈としてのつながりがある読みは単純に通用しない。あるいは、冒頭の〈題目〉が根底に通じているという読みが求められるのである。そのため列挙された〈項目〉の位相差の読み取りやこれらを中止する表現のあることを丁寧に示す必要があるだろう。

## 六、「うつくしきもの」の〈項目〉を読む——項目の背景をふまえる〈読みの縦ベクトル〉

〈項目〉を理解するとき、前述の〈項目〉の列挙に観点をおく一方で、一つひとつの〈項目〉の背景を可能な限り掘り下げ、ふまえていく読み——これらを〈読みの縦ベクトル〉とする——も提唱しておきたい。たとえば、〈瓜にかきたるちこの顔〉に関して、瓜に顔を描くことは現代社会ではほとんど見出せないだろう。なぜそれ

が可能なのか、それが可能な時代背景とは何か、といったことへの言及である。数多ある野菜や果実の中から瓜が示されたのは、瓜が紙媒体の代わりとして存在し「書かれるもの」であったからである。

すでに「瓜に歌を書きつけて贈る記事が義孝集などの私家集に散見される」ことや、さらには「うつくしきもの」に関しても瓜が「画を描き愛玩もされた」と指摘されている。<sup>19)</sup>

そこで、和歌史を確認すると、清少納言の時代の私家集には次のような用例がみられる。<sup>20)</sup>

① ないしところに立よりて、人の有しかは、う(或オハシトコロ  
二)りにかきて

こそはこれひとよはひとよつらなから立やすらひしうりにやはあらぬ

実頼Ⅰ・『清慎公集(書陵部蔵五〇一・四六)』一四六

② まらうどめきたる人まうできて、人のもとに、ちひさきうりに  
かほかきておこせたり

ながれてもうは(ママ)ひのそののみづほぞちひとりはずの  
うりとしらなむ

『能宣集』(能宣Ⅲ・書陵部蔵「三十六人集」五一〇・一二)(二七九)

参考 これがかへししてとあれば

うみわたりかはひのそのになるなればなみのみたてるうりにやあら  
るらん(二八〇)

③ やすのふ、ふみをこすれと、いひもはなたねは、うりにかきて  
うりふ山そのほと、のみたのめつ、ひさしくなるはつらきわさか

な

『馬内侍集』(三手文庫蔵辰・二六五・二六九)八一

のように、①②③から瓜を詠む和歌は瓜そのものに書かれていることがわかる。この③の馬内侍は、

生没年未詳。天曆初年(955)頃の出生か。中古三十六歌

仙の一。紫式部・清少納言・和泉式部・赤染衛門らと比肩する才女とされた。右馬頭源時明の女。はじめ斎院選子内親王に仕え、その後中宮定子に仕えて掌侍となり、馬内侍・中宮内侍と呼ばれ、晩年出家して宇治院に住んだ。馬内侍集は、九七〇年ごろ以降その晩年、おそらくは十一世紀初頭のころまでの歌稿を、ほぼ年代順に集めた自撰家集であろう。この家集によれば、藤原朝光・伊尹・道隆・実方・道兼・高階明順らの権門や公達との間に恋愛遍歴を重ねたらしい。馬内侍が重要な役割を果たした「大斎院前御集」とあい俟って、円融・花山・一条朝の女房の歌を知る上での好材料である。<sup>21)</sup>

とあることや、

④ 或女のもとに、ちひさきうりにかきて

おもはずにつらくもあるかなうりつくりいかなるよの人のこ、  
ろそ

『大式高遠集』(冷泉家時雨亭叢書『平安私家集十二』)一一六



を詠んだ藤原高遠は、

天曆三949〜長和二1013・五・一六。祖父小野宮実頼、父参議斎敏。永祚二年980非参議、兵部卿・左兵衛督を経て、寛弘元1004太宰大式（家集「大式高遠集」の書名はそれによる）。佐理・公任は従兄弟。「一条天皇の笛の師」（枕草子）<sup>22</sup>。

というように『枕草子』にも登場し、まさに執筆時の時代背景として和歌を書きつける対象であった。このような中で、次の和泉式部の存在は見逃せない。

⑤ 夕ぐれに、ちるさきうりを斎院より給はせたるに、かきつけてまいらす

夕きりはたつをみましやうりふ山こまほしかりしわたりならては

和泉式部Ⅰ『和泉式部集（榊原家本）』五八〇

⑥ ほかなるはらからのもとに、いとにくさけなるうりの、人のかをのかたになりたるにかきつけて

もし我を恋しくならはこれをみよつける心のくせもたかはす

和泉式部Ⅱ『和泉式部集続集（榊原家本）』三五四

⑦ おさなきちこのあるをみて、わかこにせんと云人に、いとにくけなるうりのあるにかきて

たねからにかくなりにけるうりなれはそのあき、りにたちもましらし

和泉式部Ⅱ『和泉式部集続集（榊原家本）』四二四  
⑧ 久しうをとせぬ人に、うりにかきて

とへとおもふ人のをとせてうりう山久しくなるはつらきわさかな  
赤染衛門Ⅰ『赤染衛門集（榊原家本）』一六三

という。⑤〜⑧の中でも特に⑥は瓜が顔の形であった、あるいは、⑦は歌を詠むきっかけに「おさなきちこ」をもとにしたとなると、単に和歌を書きつけた以上に「うつくしきもの」との近似を感じ取ることができよう。和泉式部はいうまでもなく、

和泉式部（天元元978ころ〜没年不明）は越前守大江雅致の女。和泉守橘道貞と結婚し一女（のちの小式部内侍）をなしたが、為尊親王、ついで敦道親王との恋に陥る。中宮彰子に仕え、藤原保昌と結婚し、晩年は不明。拾遺集以下に二四七首入集する。<sup>23</sup>

として、あるいは、『紫式部日記』には清少納言への批評に先立つて和泉式部の和歌への批評がなされていることは有名である。<sup>24</sup>このように、ひとつの〈項目〉を掘り下げ、背景を追究する（読みの縦ベクトル）を推進させることにより、当時の時代背景、さらに人間関係や生活空間を示し、表現を人の営みとして立体化させることを古典教育に活用することも重要なことであろう。

## 七、おわりに

「うつくしきもの」は高等学校の教科書にも掲載される著名な章段である。今日、断片的にしか古典文学にふれる機会がない現代人において、古典教育において経験する時間は貴重であり、より充実した時間となるよう、教師はその時間をプロデュースすることが求められる。

特に「共通性」を考えることには、実は〈題目〉と〈項目〉の関係、あるいはその列挙のあり方をふまえることが重要であった。類聚的章段の書式が散文としては特異であるがための対応が不可欠であるということである。それは別の見方をすれば「抽象から具体へ」の再認識ともなってくる。つまり、他者の具体的な経験を、自らに活かす上で大切なアプローチの方法でもある。この抽象と具体に関しては佐藤勝明が教材としての『枕草子』について次のように述べる。

『枕草子』では、かろうじて「にくきもの」「ありがたきもの」「うつくしきもの」「うれしきもの」などが、具体性があり、筆者のものの見方も明確かつ独創的であり、読者の主体的な読みにも堪えうるものと判断されるが、個々に扱うよりはこれらを通して、筆者の具体的な事物の挙げ方を一つ一つ検証し、その独創性に向かい合わせることがより効果的であると思われる。<sup>(25)</sup>

ここにある独創性を見出すことと同時に、自らの経験に活かす抽

象と具体の往還を学ばせていくべきであろう。今日の限られた古典教育においては、抽象と具体の往還、あるいは根本的な問いとしての〈項目〉の列挙の方法、〈項目〉間の位相差などを考えることが求められよう。一方で〈項目〉の背景を追究し、表現を人の営みへと立体化させることによって、より身近な人間関係や生活空間等も示されることになる。

教科書に指定される「共通性」を問うことはある意味〈落とし穴〉にはまりかねないことであり、それ以前にも古典教育には古典文学そのものへの関心や興味を芽生えさせる大切な役割がある。これらによって成り立つ古典教育の空間と時間は、今後のグローバル化や多様化社会における目指すべきあり方のひとつとなりえよう。そのための〈読みの横ベクトル〉ならびに〈読みの縦ベクトル〉を提案し論じた次第である。

## 注

- (1) 筆者も二〇一七年ポルトガル・リスボンでのヨーロッパ日本研究学会(EAS) 国際大会に参加し、海外の日本文学研究者と交流、情報交換をする機会を得たが、その知見の広さ、深さはたいへん刺激的なものであった。
- (2) 二〇一八年(平成三〇年)七月に示された学習指導要領の改訂では、共通必修教科目として「現代の国語」及び「言語文化」を、選択科目として「論理国語」、「文学国語」、「国語表現」及び「古典探究」をそれぞれ新設した。中でも古典に関しては、二〇〇九年(平成二一年)では選択科目として「古典A」(2単位)・「古典B」(4単位)だったのが、「古典探究」(4単位)となった。

- (3) 池田亀鑑は当初「類纂的」「随筆的」「日記的」とした。これ以後、研究者によって分類の名称に異同があるが、今日汎用性の高い名称を本論では使用する。
- (4) 各教科書が出典とするのは概ね新日本古典文学大系本(岩波書店)と新編日本古典全集本(小学館)のどちらかであり、いずれも三巻本系統を底本としている。なお、筆者による「章段対照表」が枕草子研究会他編『枕草子大事典』(勉誠出版、二〇〇一年)にある。
- (5) 津島知明「秀句のある対話——『枕草子』九七段から一〇二段までの日記回想章段群——」(『國學院大學紀要』第五四卷、二〇一六年一月)
- (6) ただし、「たふときこと 九条の錫杖。念仏の回向」(二六)といった「こと」型ととらえられる章段も存在する。
- (7) 拙論『平安宮廷文学と歌謡』(笠間書院、二〇一二年)第十四章「歌謡と『枕草子』——「歌は」「河は」章段との関わりを中心に——」第十五章「『枕草子』類聚章段と作者の手法——「すさまじきもの」章段の叙述を中心に——」などにおいて類聚的章段を論じた。
- (8) 坏美奈子は「題」の草子——『枕草子』——「和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究」『標題文芸』(参)二〇〇五年三月において類聚的章段の題の挙げ方を「標題文芸」の視点からとらえ直し、『枕草子』における《標題》には《主題性》を有することを述べている。
- (9) 前田雅之「なぜ古典を勉強するのか：近代を古典で読み解くために」(文学通信、二〇一八年)。前田は「古今和歌集」・「伊勢物語」・「源氏物語」に『和漢朗詠集』を加えたものが「古典」と呼ぶのにふさわしいことを近時、改めて提唱している。
- (10) 二〇一九年一月二六日からJRR東海のテレビCM「そうだ、京都行こう」には「二〇一九春はあけぼの・日の出編」として二代目ナレーター柄本佑の初のバージョンが放映されはじめた。
- (11) 小森潔『枕草子研究』論——『言説史』へ——(『國語と國文學』平成十七年五月特集号、二〇〇五年五月)あるいは古瀬雅義「あと

- がき」(浜口俊裕・古瀬雅義編『枕草子の新研究——作品の世界を考える』、二〇〇六年、新典社)など
- (12) 本文は三巻本を底本とした松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年)を用いた。
- (13) 教科書会社によって「学習」、「学習の手引き」、「研究」などといわれる。
- (14) 上野理は「枕草子『みるにことなることなきもの』の文字にかきことごとしきもの」考(『古代研究』第一号、一九七一年十月)『枕草子』表現と構造、有精堂、一九九四年に再録)において特に「もの」型について、
- 「——もの」型類聚章段の通性として一つの法則めいたものを指摘することができる。「——なるもの」を〈問〉とし、その下に列挙する品名や事象を〈答〉とすると、複雑な〈問〉の場合は〈答〉が簡単になり、〈問〉が無限定なものは〈答〉で限定する。つまり、〈問〉と〈答〉とは難易や限定の程度において反比例するという(法則)である。
- と、法則性を指摘する。
- (15) 多門靖容(二〇〇一)「類聚章段の思考——枕草子の感性」『表現研究』九四号
- (16) 森雄一「列叙法の二面性とその周辺」(『成蹊國文』第四十七号、二〇一四年三月)。
- (17) 森前掲論文。
- (18) 〈項目〉の原資料から記録・採取されたことを想定することも有効であろう。具体的には女房達のやりとりの結果が反映されたのであれば、その場の時間的制約が自ずと影響することもある。あるいは下賜された紙の量を考慮したことなども想起できる。
- (19) 『歌ことば歌枕大辞典』「瓜」の項目、安村史子担当。
- (20) 私家集は『新編私家集大成CD-ROM版』(エムワイ企画、二〇〇八年)による。
- (21) 『新編私家集大成CD-ROM版』馬内侍集『解題、今井源衛担当。

(22) 『新編私家集大成CD-ROM版』『馬内侍集』解題、有吉保担当。

(23) 『新編私家集大成CD-ROM版』『和泉式部集』解題、藤岡忠美担当。

(24) 『紫式部日記』には以下のように載る。

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ、うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉のにはひも見え侍るめり。歌は、いとをかしきこと。ものおほえ、歌のことわり、まことの歌詠みざまにこそ侍らざめれ、口にまかせたる言どもに、必ずをかしき一ふしの目にとまる詠み添へ侍り。それだに、人の詠みたらむ歌難じことわりあたらむは、「いでやさまで心は得じ、口にいと歌の詠まるなめり」とぞ見えたるすちに侍るかし。「恥づかしげの歌よみや」とはおほえ侍らず。(山本淳子訳注『紫式部日記』角川ソフィア文庫、二〇一〇年)

(25) 佐藤勝明「高校『国語Ⅰ』の古典教材」(和洋女子大学紀要 第三十六集(文系編)、一九九六年三月)

(なかだ こうじ)

Analytic pitfalls found in “Endearingly lovely things” in  
*Makura no soshi*: Reconsideration of strategic directional  
approach to analysis is needed to avoid pitfalls in  
interpretation of classic chapters.

Koji NAKADA

Abstract

This article will discuss the common approach to analyze the theme and the elements found within a classic chapter, such as “Endearingly lovely things,” and to explore the function of each element to the whole work using the linguistic method of accumulation. Further discussion challenges the current standard analytical approach adopted by the secondary level Japanese classical literature education. Author suggests a comprehensive approach of introducing the classic literature to high school classrooms by incorporating not only the lateral examination of the elements, but also an in-depth/vertical analysis of each element in historic or situational perspectives. Without both the vertical and lateral examination, one would be left with only an incomplete and potentially shallow interpretation of the work.

Keywords: The eleventh century Japanese literature, Japanese classical literature, classical literature education, *Makura no soshi*, literary function, analytical approaches,